

合掌

御父上様の御逝去をまだ信じられない気持ちのままに、秋彼岸も過ぎ忌明けの御厚志を賜り、又越後の銘酒越路吹雪を頂戴いたしまして深く感謝をいたしますと共に、少しずつ旅立たれた事実をうけとめております。

御葬儀、御法事と御多忙の中、お悲しみも日々つのることと存じますのに、お心こもる御配慮を賜りましてありがたく厚く御礼申し上げます。早速、亡夫に供えさせていただきました。バックス御夫妻は誠に連理比翼の言葉そのままの仲睦ましい夫婦の在り方をお示し下さいました。今も奥様をお呼びの折の「とおーしこ」というお声が聞こえる思いでございます。

酔うと亡夫がまねをして、失礼にもそのように呼んではお母様を笑わせていたとのお話を伺いました。お母様が陰でしっかりとお支えになられたからこそ、御研究に打ちこまれ各界の著名な方々との交際も円滑に事を運ぶことができたのではと存じます。何百万回も奥様のお名前を呼ばれ、信頼されていたお母様は人知れぬ御苦勞もおありだったと存じますが、最高にお幸せな御方でございました。先立たれたお悲しみはどんなにお辛いことであったかと推察いたしておりましたが、神戸のお家へ同居なさって献身的なお世話をなさいましたあづみ様の御孝養心篤い日々は、お父様のお顔に明るさがもどりお声も張りのあるお電話にお幸せなお暮らしをしのばせていただきました。ほんとうに大変な日々であったこととお察しいたしております。

もうお苦しみも何もない彼岸でお母様と手を取りあわれ楽しく登山や散歩をなさっていらっしゃる事と存じます。岩稜会の先に逝かれた方々や松田もいっしょになって「バックス」「バックス」と越路吹雪を酌み交わしているかもしれません。寂しいけれどそんな風景を想像しながらバックスのこと、偲ばせていただいております。亡夫にとりましてバックスはまさに神様、守護神、唯一の導きの神でございました。御恩は山のように私共何もお報いできなかつたと、申し訳ない思いでいっぱいでございます。松田亡きあとも私までお声をかけて頂き、ごいっしょさせて頂いた出版記念会も生涯忘れられない思い出となりました。

御介護のお疲れが出ませんようにくれぐれも御自愛下さいますよう御健康をお祈り申し上げます。併せてバックスの御冥福をお念じ申し上げます。

合掌

松田 郁子

十月七日

石岡 あづみ様

注…松田郁子さんは昭和22年7月屏風岩を初登攀した三人の内の一人松田武雄さんの奥様です。
その後、松田さんは第4次と第八次の南極観測隊員として、活躍されました。下の新聞はそのときの物です。



左の写真
昭和34年9月にご結婚後
10月には宗谷に乗り込む
ため東京へ発
たれました。
伊勢湾台風の
ため電車が動
かず、船で向
かわれました。
写真は船中の
松田ご夫婦。
父も同行しま
した。

昭和36年1月17日 朝日新聞 (内容を転記)
宗谷 西航して氷状調査

「宗谷」の明田船長から16日午前3時半までに海上保安庁に入った報告によると、「宗谷」は15日午後5時(日本時間午後11時)現在、昭和基地の北北東約181キロ(南緯67度27分、東経40度56分)外洋を西航しつつ氷状調査中。付近の氷状は連日の南ないし西よりの風で進入を開始したころにくらべて約44キロ北方に張り出している。

—写真下の解説—

宗谷に帰った(右から)景山、松田両隊員 左へ小林医務長、和崎看護長、明田船長(後ろ向き)
(両宮隊員撮影→宗谷-KDD電送)



左の写真 昭和50年1月26日
屏風岩登攀記 第2版出版記念会
岩稜会会員の方々。

中央着物姿が母、左隣が父、その左、
初登攀の内の一人本田さん、その左、
立膝の松田さん。

下の写真 平成18年4月1日
岩稜会宴会

下段右より 中澤・伊藤(社長)・
父・赤嶺さん
上段右より 黒田・今井・森・岩浅・



河尻・大井・松田さん
岩稜会の三羽鳥と云われた伊藤・赤嶺・父
が、最後にご一緒した写真です。伊藤・河
尻さんも父の後を追われる様に亡くなりま
した。
松田武雄さんは昭和63年8月13日に他
界。あまりにも早い惜しまれる死でした。